

諏訪小だより

令和3年9月1日

9月号

多摩市立諏訪小学校

校長 齋藤 幸之介

高校野球のある試合から学んだこと

校長 齋藤幸之介

豪雨による各地の災害が多く報道された夏でした。私自身の不勉強さをさらすようで恥ずかしく思っておりますが、「線状降水帯」という用語も頻繁に使われるようになったと捉えております。急に降り出す雨に身がすくむこともありました。

新型コロナウイルス感染者数は急激に増加しました。夏季休業中の水泳指導も中止となり、また、夏休みも延長せざるを得ませんでした。そんな中、オリンピックは終了し、今パラリンピックはフィナーレを迎えようとしています。未曾有の状況下でありながらも競技に挑むアスリートの姿には心打たれたと思っていますが、皆様はいかがでしょう。

夏の風物詩の一つである高校野球の全国大会は、入場制限をされながら2年ぶりに開催されました。しかし、これも天候の影響を受けて順延に次ぐ順延、と本当に気の毒になりました。その中で特に注目を集めたのが、8月17日(火)に行われた大阪桐蔭高校と東海大学付属菅生高校の試合でした。

悪天候下で試合終了を告げた主審

試合は大阪桐蔭のリードで進行していきますが、徐々に東海大学付属菅生も反撃し、白熱した戦いとなりました。しかし、試合開始当初から降り始めた雨は次第に強くなり、グラウンド全体に水が「浮いた」状態になりました。8回の表、東海大学付属菅生の選手が打ったボールは、守っている大阪桐蔭の選手の前で止まるほどでした。この直後、主審の山口智久さんは試合を中断し、それからしばらくして両チームの主将を呼んで試合終了を告げました。山口さんは、二人の顔を交互に見ながら丁寧に説明をされました。そして、二人がベンチに引き上げたことを確認した後に右手を挙げて試合終了を告げ、深々と礼をされました。

「責任を負う」－教育的立場から

山口さんはかつて高校球児であり、また現在は東京六大学の審判としても御活躍です。東京六大学野球連盟のホームページには山口さんの選手へのメッセージが載せられていますが、そこには「熱意や品位のある」試合を目指してほしい、とあります。他の審判の方々からはなかなか読み取れない、山口さんの学生への願いであることを理解できます。

山口さんは、この試合でもそうでしたが、例えば攻守が交代する場面で選手に言葉をかけられるそうです。「ジャッジはもちろん大事ですが、選手をもち

立てるような声かけが大事だと思っています」。学生野球には「教育的立場もある」から、という御自身の立場を深く認識されていることが伝わってきます。この試合を途中で打ち切れれば「批判」を浴びることは百も承知でいらしたでしょう。実際、悪天候下でこの試合を強行した正否を問う意見は多く寄せられました。御自身も「自責の念は消えない」とおっしゃっています。試合終了の判断は審判団で行った、と言われます。しかし、主審であったが故にそれこそ一人でその責を負うたように見えた山口さんのお姿に、私は、ぐっ、と胸が詰まる思いがしました。

「批判」を受け止めながら

一つの教育活動を行う際には必ず判断があります。本当にこれが正しいのか、いつもそう思いながら私共は日々実践を繰り返しています。また、その中で、例えば子供たち同士のいざこざも起きます。訴えや御意見を頂戴することがあります。その後の対応に戸惑うことも少なくありません。

「批判的思考 critical thinking」という用語があります。批判、というと「相手をやっつける」や「揚げ足をとる」などと捉えられがちですが、一定の基準から評価し、そして次なる取組等に生かしていく、と捉えることが肝要と言われます。私は、山口さんが様々な批判を全て受け止めながらも責任をとろうとするそのお姿から、教師としてのあり方を学んだ、と感謝をしています。

山口さんが最後に二人の主将にかけられた言葉は以下の通りであったと言われていました。「大阪桐蔭と東海大菅生が甲子園で再戦できるように、これからはがんばってほしい」。どんなときにも子供たちの立場に立ち、そして気持ちに寄り添う、私は、このことを夏休み明けに教職員に伝えました。

まだまだ厳しい日々が続きますが、皆様には、引き続き御理解と御協力をお願いいたたく存じます。

(参考)

安藤嘉浩「降雨コールド 球審の思い」

朝日新聞 2021年8月24日朝刊

岡本朋祐「無念の降雨コールド 選手に寄り添う最大限の配慮が見られた審判員【2021夏の甲子園】」

週刊ベースボールONLINE 2021年8月17日

「一般財団法人 東京六大学野球連盟」ホームページ
井上尚美「思考力育成への方略－メタ認知・自己学

習・言語論理－」 明治図書2007年